
SHOOTING STAR ROCKMAN ~ Shortstory ~

アポロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S H O O T I N G S T A R R O C K M A N 〈 S h o r t s
t o r y 〉

【Nコード】

N 7 7 9 6 H

【作者名】

アポロン

【あらすじ】

メテオG事件から、あのひと達はどうしているのでしょうか？実は流星のロックマン！今は青いこの星と全部つながってます！その番外編てきなものです。こちらはいつ更新するかわかりません（；。；）

SHOOTING STAR ROCKMAN 〈Short story〉

キャラクター別にストーリーを書いていこうと思います。
暇つぶしていどにでも読んでくれればうれしいです。

シドウ、始動（前書き）

くだらないタイトルですね（笑）
ではどうぞ！

シドウ、始動

「まだ退院できないんですか？」

「うん・・・後二日くらいは無理ね」

「もう大丈夫ですよ」

さつきからぐちぐち言っている、ベットによこたわっている青年は、
暁シドウ。

世界のヒーロー、「ロックマン」の命を爆発から救った影の（？）
ヒーローだ。

あの爆発を、奇跡的に生き延び、いまにいたる。

「もう少しぐらい我慢なさいシドウちゃん」

「もう動きたくてうずうずしてるんですよ！」

そうつとシドウは、うでたてをはじめ。

そこに・・・

「二日ぐらい我慢なさいよ！ 子供じゃあるまいし・・・」

病室に入ってきたのは、クインティアだ。手にはうまい棒の入った袋をさげている。

クインティアは元ディーラーのメンバーだったが、ロックマンにより改心、

毎日シドウのお見舞いにくる。

「おお、おはよう。いいじゃんか。動いてたいんだよなんか！」

「よくないわよ・・・まったく。そんなことして傷口ひらいたらどうするのよ」

「うるさいな！ しんぱいしすぎだよ！」

「しんぱいしすぎですって・・・！ あんなことになって心配しないほうがおかしいわよ！
しんぱいしてそんしたわ！」

そういつてクインティアは病室から出て行ってしまった。

「言ってることが矛盾してましたね・・・」

彼はアシッド。シドウともに生き延びたウィザードである。

「クインティア・・・」

(シドウ、やはり気にしますよね・・・)

(うまい棒はおいていけよ・・・！)

その後二日間、クインティアはくることなく、シドウは退院した。
明日あやまれればいいや。 という考えだったシドウには、けっこ
うつらかった。

「アシッド！どっしよっ！どっしよっ！どっしよっ！」

「おちついてくださいシドウ・・・とりあえず星河スバルた

ちのところにもいきますか?」

さっきからずっとこんなだったシドウにとりあえず言ってみた。

「・・・そうだな。あいつらには俺がぶじってこと、いつてないかな」

なぜいかなかったのか?それはシドウいわく「サプライズ」 といふことらしい。

「じゃあいくか!」

とりあえずクインティアのことは忘れ、コダマタウンに向かうことにした。

まだ電波変換できるほど回復してないので、ウェーブライナーでむかうことになる。

「おー!ひさびさの外の風景だ!」

外の風景をみて、シドウは、ふいになきそつになった。

「どこかしましたか？シドウ？」

「いや・・・いきてるんだなって・・・」

「そうですね・・・」

しばらくして、ウェーブライナーはスピカモールでまった。

「シドウ。お土産でもかっていったらどうですか？」

「そうだな！」

そしてシドウは、駄菓子屋に向かった。

「やっぱこれだよな！」

シドウはお土産に、やはりうまい棒を買った。

（やはりこうなりましたか・・・）

しかも今回は30本パック。さらにお土産のはずが、自分の分まである。

とつぜん、シドウが、あっ！と声をだした。

「どうしました？」

何回きいたことが・・・

「ミソラの仕事、今日休みみたいだから多分いるな」

そういつてシドウはまた駄菓子屋に入っていった

シドウ、始動（後書き）

感想まっています！

シドウ、始動2

「そういえば、どうして響ミソラの仕事が休みということを知ってるんですか？」

「それはな・・・」

「・・・!」

いつも冷静なアシッドもこれには動揺をかくせなかった

「さすがにそれはNGです・・・」

「フフフ・・・」

「どうやってその事をしったかは・・・」

ヒミツだ

そしてシドウが、駄菓子屋からでたとき

ピーッ（現在、ここ、スピカモールにて、ウィザードが暴走！くりかえします・・・）

「シドウ！」

「ああ、アシッド！電波変換、いけるか？」

「いえ、電波変換はまだ・・・」

「わかった！じゃあ、ウィザード・ON！」

ハンターからでてきたアシッドは、一言言った

「この事件、ウィザードを影で操る者がいます」

「じゃあ俺はそいつをさがす！」

「わかりました。おきおつけて・・・」

「そっちな！」

こうして二人は分かれた。

「サテラポリスです。おとなしく投降しなさい」

こんなことをいって投降しないのは百も承知だが、義務みたいなものなので

「ジジ・・・ダレガ・・・スルモノカ！」

あくまで、暴走を演じるみたいだ。

「そうですか・・・ならしかたありませんね」

そう思ったかと思うともうすでに敵ウィザードの背後にまわっていた

「アナタのスペックでは、ワタシに勝つことはふかのうです」

「・・・グ・グ・・・」

アシッドは、核心にせまる。

「アナタのオペレーターは、どこですか？」

「ナ・・・ナンノコトダ・・・？」

しらをきるので、アシッドはソードを敵ウィザードのくびにちかづけた

「わ、わ、わかった！吐くよ！俺のオペレーターは・・・」

「シドウ、犯人は「歯医者」の横のトイレだろ!？」

どうやらシドウは、もう知っているようだ。

「なぜわかったのですか？」

「なぜって・・・」

なぜかシドウは、言っのをためらう。

「言わなきゃダメ？」

「報告があるので」

アシッドは、そっけなく言ったが、なぜかオーラがシドウには見えた。

「いや、実は・・・」

く回想く

「わかりました。おきおつけて・・・」

「そっちな！」

その言葉をかわして、すぐ、シドウはトイレに行きたくなったのだ。

そして、小便をしていると・・・

「そこは、やりすごせ！ああ、なにやってるんだよ！・・・」

なんて声が個室（洋風便器）から聞こえてきたのだ。
あやしい。と思ったシドウは、ハンターの、ロック解除プログラムで
カギをあけ（オイオイ・・・）怪しい男が、ハンターにむかって叫

んでいた。

「・・・うおっ！何だお前！」

「サテラポリスだ。こんな時になにをしてる！」

サテラポリスと聞いて目の色を変えた男は、

「うっ！・・・くそっ！！！」

と叫びながら、ナイフを持った手でシドウに突っ込んできた。

シドウは難なく攻撃をさけ、その男を逮捕した・・・。

「・・・てわけよ!」

「シドウ・・・いきなりトイレ・・・もっと緊張感をもってください」

「まあ結果オーライ?」

「はぁ・・・でも生身で犯人タイホはさすがです」

「そうかぁ?・・・って速くコダマタウンいかないと!」

「そうですね。急ぎましょう」

こうして事件ひとつ、実質復帰戦、
解決したのだった。

シドウ、始動2（後書き）

どうでしたか？少しでも楽しんでもらえたらうれしいです！
この シドウ、始動 は次で完結（？）です！
もしまたみかけたら読んでくださーい！

感想、まってまーす！

シドウ、始動3（前書き）

この前、次で終わります
とか書いたのにまだ続きます
すいませんでした！

シドウ、始動3

ーコダマタウンー

「・・・と、いうわけで今からペディアに新しい能力を、加えたいとおもいます！」

スバル達5人（スバル、ルナ、ゴン太、キザマロ、ジャック）は、BIGWAVEの前の公園で何かしていた。そこに・・・

「スバルくん！！」

と、よく通る、ソプラノトーンの声が響いた

「ミ、ミソラちゃん！？」

と、いきなりミソラはスバルに抱きついてきた。

「ち、ちよつとミソラちゃん？」

そこでルナがいきなりミソラをつかみ、強引にスバルからひきはなす

「ちよつとスバル君！？どういうことかしら？」

ルナが怒りの矛先を向けたのは、ミソラではなく、スバルだった

「そうだぞスバル！説明しろ！」

ゴン太もだ

「ななななにもないよ！」

というスバルはあきらかに動揺している

この夏休みの間に、なにかあったのは間違いなさそうだ

あわれなスバル、怒る2人、ふたたび抱きつくミソラ、
いやらしい笑みをみせるジャック

完全に忘れられたキザマロ。

4人（キザマロ、のぞく）が、がやがややってるすみで、

「まったく・・・いつもいつもさわがしすぎだぜ」

とつぶやく彼はウォーロック。星河スバルと電波変換することで、
いわずと

知れた（大吾がいつてしまったからだ）世界の英雄、ロックマンとなる

「まったくです・・・まあアナタにはおよびませんが」

「んだとコ・・・ラア？」

そこに、何とか尋問をのりきったスバルがあわててくる

「アシッド！？どうしているの？」

スバルがあわてて聞く

「どうしてって・・・生きてるからさ」

そこにたっていた青年の姿に、スバルは目を疑った

「暁・・・さん？」

そこでシドウは

「ヒーローは遅れて・・・」

なんて言い出したが、

バタッ！

スバルは衝撃のあまり気絶しそうになり
倒れてしまった

「スバル？・・・おいスバル！」

みんな（こんどはキサマロふくむ）とシドウが駆け寄ってきた

そこでスバルの意識は、完全に途絶えた

シドウ、始動3（後書き）

感想の返事の書き方がわからないので
この場をおかりして・・・

クイッククロッドさん、貴重なアドバイス、
ありがとうございます！
さっそくやってみました。どうでしたか？
これからもがんばっていくので
またよろしくお願いします！

あとクイッククロッドさんの小説も
いつも楽しくよませてもらってます！

最後になりましたが、
ホントに次が最後たぶんになります
またみかけたらぜひ読んでください。

あとおかしいところがあつたら
おしえてください。
お願いします！

シドウ、始動 last (前書き)

ホントに最後です。

シドウ、始動 last

「うゝん・・・」

「お？おきたかスバル。」

「あれ？僕どうして・・・
なにか大変な事があつたような・・・？」

そう、スバルは突然生きかえつた（スバルの中では）
シドウを見て、きぜつしたのだ

「あつ！そうだ！暁さんが！！！
・・・夢・・・だったのかな・・・？」

すると、ウォーロックが何かもって近づいてきた

「夢じゃねーぜ！今はいねーけど。
これおいてったぜあいつ。スバルに、だつてよ！」

ウォーロックが持っていたのは、
うまい棒（30本パック）だった。

「た・・・たしかに暁さんだ・・・」

しかもなつとう味・・・って
それはともかくもうちょっとゆつくり
していつてくれればよかったのに・・・」

「また今度くるってよ！今はいそがしいみたいだぜ！
なんでもクインティアがなんたらかんたらとか」

そついうとウォーロックは、クククツ、
と笑った。

「わらっちゃだめだよロック。
でもあの二人ってほんとにどうなんだろうね？」

「さあな。でもおまえは今、
人の事いえねーよなあ？」

ふいをつかれたスバルは、一瞬で顔を赤くし、
ウォーロックは、また、笑いだした・・・

ーヤシブタウン

103デパートー

「こんなんでもいいかな？」

シドウは今、クインティアにあやまるための

プレゼントを買いにきている。
いわゆる、物でつつちゃおう作戦、だ

「シドウ・・・また怒鳴られたいのですか？」

「・・・？」

シドウが今目をつけているもの
それは、ダイエツトマシーンだった

「・・・いや、これマテリアルウェーブだし
けっこういいとおもうけどな？」

「ふつう女性に、このようなものを渡すのは
失礼じゃありませんか？」

ガヤガヤ・・・

けっこうでかい声でいいあらそう二人は、
ほかのお客さまにもかなり迷惑だ（そして目立つ）
そこにきてしまったのは・・・

「なにしてるの二人とも」

クインティアだった

ーデパート屋上ー

「あのなクインティア？この前のことだけど・・・」

シドウはなんとかクインティアを屋上につれてきた
もちろん、誤るためだ

この前のこと、と聞いてもクインティアは
無表情だった

「・・・」

（はやくいったほうが楽ですよ）
（わかってるよ）

「あれは俺が悪かった！ゆるしてくれ！」
かなりでかい声で、まわりに響いた

「ほんとにそう思ってるの？」

ようやくクインティアが重い口をあけた

「思ってるよ・・・」

シドウが、やけにしんみりと言う

「そう・・・ありがとう・・・」

シドウがジョーカーと爆発したのって
・・・私にも罪があるようなきがして・・・

目をあけなかったらどうしようとか、
ずっとおもってたのよ・・・」

クインティアは顔をふせた
泣いてはいないようだ、かろうじて涙を
おさえてるじょうたいだった

「クインティア・・・」

するとシドウは、クインティアをそっと、抱いた

「シドウ・・・」

クインティアが、つぶやくように言った

「あれはクインティアのせいじゃない・・・
ちがうんだ・・・」

シドウはやさしく言った

「シドウ・・・好きよ・・・」

シドウの顔は、赤くなっただが、動揺はしなかった
・・・なんせ大人だ・・・

「俺も・・・愛してるよ・・・」

シドウがそういったのを聞いて、
クインティアは、眠ってしまった

ーお
わ
りー

シドウ、始動 last（後書き）

えゝこれで「シドウ、始動」はおわりです。

終わりがた、どうでしたか？

初投稿ということもありまして

かなり問題の多いことだったとは

おもいますが、すこしでも

楽しんでいただけたらうれしいです！

はじめから話数

をきめていた（一話のびましたが・・・）

ので、最初のけんかは、

すぐ終わらせました。

すこし、残念です。

あと、シドウ、始動は終わりましたが

別の小説、短編は書いていこうと

思いますので、そのときはまた

よんでみてください！

ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7796h/>

SHOOTING STAR ROCKMAN ~ Shortstory ~

2010年10月9日22時11分発行